

した高坏 B1 の約 80%が縦方向である。高坏B2：坏部が丸椀状で開脚高坏のものをB2a、脚底部が下部で強く屈曲し広がるものをB2bとした。出土量はB2aが 5 点前後、B2bが 2 ~ 3 点である。

器台：外来系の小型器台Aへの移行が進み、3分の2を占める。器高10cm前後の外来系小型器台で、ミガキ調整を丁寧に施した精製品が多い。口縁端部に面を取り、端面に綾杉文を施したものもみられる。受部底部から脚部への穿孔を施さない小型器台Bが 1 点出土した。県内での出土事例は少ない。器台Bは月影式期以前に導入された器台の系譜を持つもので、有段口縁器台C1が 1 点、装飾器台の系譜で受部に円孔を穿つ退化形態の器台C2が完形に近い状態で 1 点出土した。

以上、古墳時代初頭前後の土器について概観した。全体をみると、「く」の字口縁甕、外来系の高坏・小型器台が高い割合を占める。壺は容量により盛行する器形は異なるが、いずれも白江式期以降に盛行するものである。有段口縁を持つものは退化形態のものがみられる程度で、ほぼ払拭されている。

古府クルビ式期に現れる布留傾向甕はないが、その口縁部形態の特徴が壺D3に折衷様式として受容されたことが確認できた。

のことから当調査区の出土遺物の特徴は第一に、白江式期新相から古府クルビ式期の土器群にもかかわらず、甕Aがほとんど出土していないこと、第二に県内で出土事例が少ない壺F(台付壺) や蓋B(有鉢筒状蓋) などが含まれている一方、残存率の高い台付装飾壺や装飾器台などはみられないことである。

第一の点をみると、富山東部地域に位置する新堀西遺跡など月影式期からの長期継続集落では、古府クルビ式期以降も高い割合で有段口縁の土器が残存する傾向がある。白江式期～古府クルビ式期の集落にもかかわらず甕 A が淘汰されている点からは、外来系の集団の入植の可能性が考えられ、この場合、出土遺物の特徴から、能登方面の可能性が高い。一方、1995 年度調査区から出土した土器は第 11 表のグラフにみられるように甕Aや壺Aの比率が高く、月影式期の色合いが濃いことから、方墳「ちょうちょう塚」を築造した地域の拠点的集落が弥生終末期から白江式期にかけて発展をつづけ中心部が沼に沿って集落が東へ移動または拡張した可能性が推察できる。

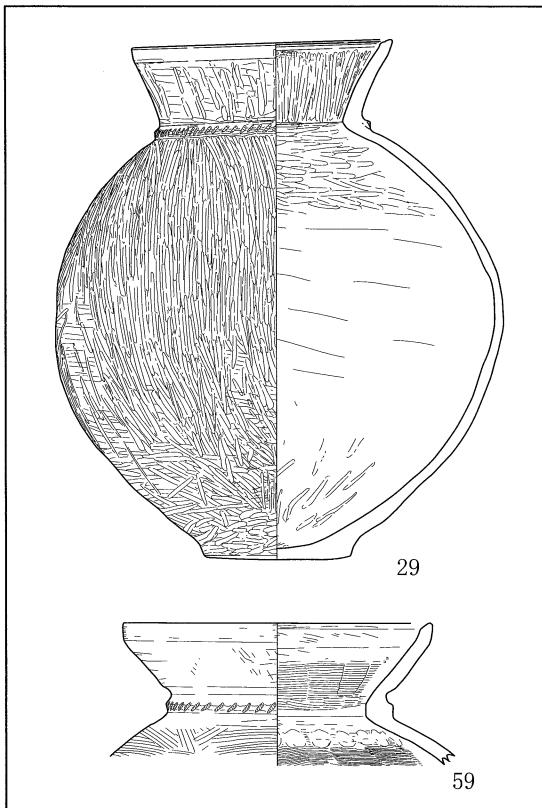
第二の点をみると、当調査区で出土した器種の土器と同様のものが出土している遺跡として、蔵野町東遺跡がある。蔵野町東遺跡は弥生時代後期後半の法仏式期から古墳時代初頭の白江式期までの期間を通じて自然流路における祭祀が行われたとされる遺跡で、細頸台付壺や装飾器台が多量に出土している。水辺の祭祀場という同様の性質を持つ遺跡にもかかわらず、当遺跡では残存率の高い装飾器台、それと併行する時期に富山県北東部で導入される台付装飾壺のいずれも出土していない。また、これら「格式の高い」祭式土器は 1995 年度調査区でも出土していない。あわせて周辺の当該期の遺跡をみてみると、大規模な調査が行われていないためという可能性はあるものの、いずれの器種も残存率の高いものは出土していない。その一方で、水系の異なる新堀西遺跡では装飾器台が3個体以上、台付装飾壺が5個体以上出土している。以上のことから、富山県東西の地域差に加え、より狭い範囲での受容の違いが存在したと推察出来る。

### 第3節 折衷型土器について

当調査区SD01 及びSD55 から、古墳時代遺構出土土師器器種分類（第5図）壺D3に分類した折衷型土器が出土した。特徴は①口縁部内面に面を取る技法と、②頸部に刻入突帯文を巡らす技法を併用する点である。SD01 から出土した 29 はやや外傾気味に口縁が立ち上がり、端部外側に細く面を取る。中型壺で体部は球胴状を呈し、底部は平底で安定性を志向した器形である。SD55 から出土した 59 は、29 に比べ口縁の傾きが急で、端部外面にしっかりと面を取る。体部は出土しておらず形態

は不明である。①は畿内系の布留甕の特徴であり、口縁部を肥厚させないことから布留0式の影響もしくは意識的に受容していない可能性が指摘できる。前述したように、布留傾向甕、布留系甕は八町II遺跡や利田横枕遺跡、新堀西遺跡等で出土しており、古府クルビ式期には富山県東部で受容されることが確認できる。当調査区では布留系甕は出土しないにもかかわらず、口縁部の技法のみ受容している点が特徴であり、同様の技法を用いた折衷型壺の出土事例は周辺の遺跡では確認できなかった。②の頸部突帶文は東海系の大型壺に系譜を持つもので、同様の器種器形で口縁部内面に面を取らないものは北陸西部地域で確認されており、富山東部には能登からもたらされた可能性が指摘されている（田中・中谷 2001）。また刻入突帶文は壺（27・28）などにもみられるほか、器台（49・55・142・147）や蓋（132）など精製土器に多用されており、当調査区の集落で好んで使用した技法であると考えられる。

こうした折衷型の存在は、在来系から外来系、特に畿内系への移行期である白江式期・古府クルビ式期にみら



第33図 折衷型土器

れるものであり、他の集落で確認できない器種（折衷型土器）の存在は、当集落が能登を中心とした他地域との交流が盛んであることとともに、集落や地域の規制やまとまりが緩やかで、外来系の影響の受容を主体的に選択できる状況にあったことを証明するものと考える。

（朝田）

#### 参考・引用文献

- 池野正男 2012 「越中の古墳時代土器様相」『大境』第31号 富山考古学会  
 越前慎子 1996 「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告』財団法人 富山県文化振興  
 財団埋蔵文化財調査事務所  
 河合忍 1997 「IV考察 4考察 e 甕形土器の口縁部形態類別構成比」『翠尾I遺跡』八尾町教育委員会  
 高橋浩二 1995 「越中における古墳出現期の様相」『大境』第17号 富山考古学会  
 田嶋明人 1986 「IV考察 漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター  
 田中幸生・中谷正和 2001 「越中における古墳出現前後の地域別土器編年 - 甕形土器を中心に - 」『蜃気楼』  
 藤田富士夫 2004 「古代越中新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『人文社会学研究所年報』No.2 敬和学園大学  
 藤田富士夫・駒見和夫 1981 「ちょうどよい塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会  
 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館  
 財団法人 大阪府文化財センター 2003 『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』  
 小杉町教育委員会 1999 『HS-04 遺跡発掘調査報告』  
 庄内式土器研究会 2003 『庄内式土器研究X-XVI- 庄内式併行期の土器生産とその動き -』  
 立山町教育委員会 2001 『利田横枕遺跡 - 主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う調査報告書 -』  
 富山市教育委員会 1998 『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』  
 富山市教育委員会 2006 『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2006 『富山市打出遺跡発掘調査報告書 - 一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報  
 告 -』  
 (財) 富山県文化振興財団 2012 『水上遺跡 赤井南遺跡 安吉遺跡 棚田遺跡 本江大坪I遺跡発掘調査報告』  
 (公財) 富山県文化振興財団 2013 『上梅沢遺跡 水橋金広・中馬場遺跡 新堀西遺跡発掘調査報告』  
 (公財) 富山県文化振興財団 2013 『下黒田遺跡 下佐野遺跡 諏訪遺跡 蔵野町東遺跡 蔵野町遺跡 駒方南遺跡発掘調  
 査報告』  
 婦中町教育委員会 2003 『富山県婦中町 鍛冶町遺跡発掘調査報告』  
 八尾町教育委員会 1997 『翠尾I遺跡発掘調査報告書1』